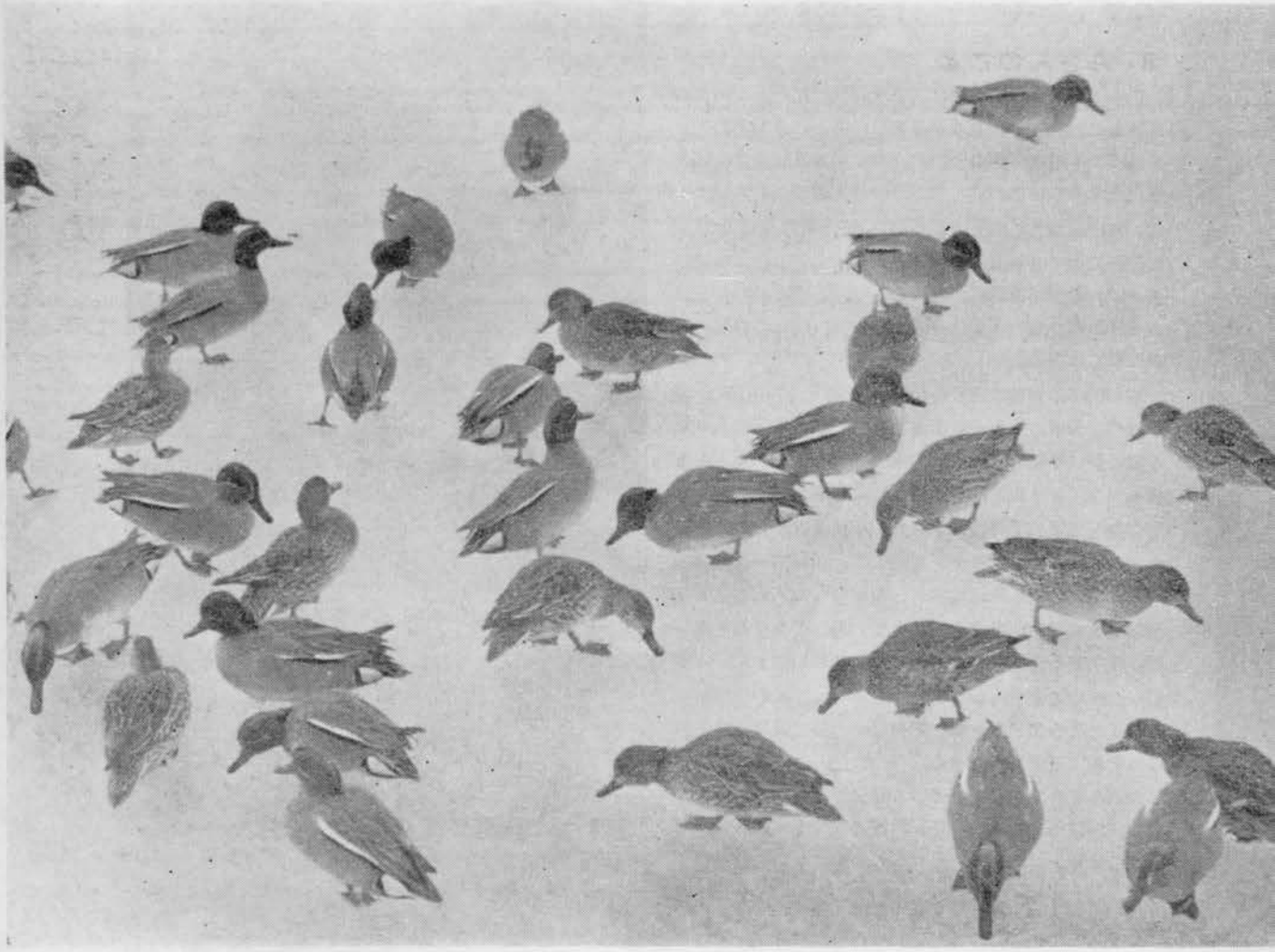
毎月1回25日 発行　　第3種郵便物認可(昭和35年7月26日)　①

山と博物館

第 6 巻 第 12 号　　1961年12月25日



コ　ガ　モ

新潟県瓢湖にて　　撮影　佐野　昌男

大町山岳博物館

館を訪れて

—大町と私— 田中 薫

1，はじめに

この博物館ができる時，出品するようご注文を受けたが何もしなかったのが気がかりであった。さる10月白馬山麓に遊んだ帰途，家内と二人で初めて訪れたところ，創立10周年を迎えるのだと聞いて，身にかなうことあらばと思い，これもその一つと筆をとることにした。

2，丸さんのこと

こんど白馬へ行ったのはさる9月14日に死んだ細野の丸さんこと丸山静男君の墓参をし，あととりの高君夫妻をはげますのが目的の一つだった。日取りは丸さん健在中からきめていたのに，その日が故人の30日の立日だった。丸山家の古い舟底型の石塔の数立つ中に新仏の墓標があって，ビール瓶にいま盛りのコスモスの花が生けてあった。秋深い五竜岳が見おろしている中で，私たちは小さな茶瓶からお茶をその辺に注いでしばらくの間，丸さんのことを偲んだ。

昭和10年の春私が部長をしていた神戸大学山岳部が遠見尾根で合宿したとき、部員たちは丸さんと気が合ったので、翌11年積雪期の台湾中央山脈への遠征に丸さんを日本アルプス・ガイドの代表として参加してもらった。足立源一郎画伯も特別参加され，私は名ばかりの隊長だったがみなよく気が合って南湖大山，次高山，大覇尖山の積雪期初登頂に成功した。台湾総督府の大歓迎を受け台北では台湾料理の盛宴のあと酩，酊して丸さんも演壇に立往生する愉快な場面もあった。高君の話では死期の迫った床中で丸さんはしきりにパイナップルの缶詰をほしがったそうだがきっと台湾を思い出していたにちがいないと思うとあわれである。

丸さんはいつも明るいそして働きのある人物だったから，戦中は在郷軍人会長を，戦後は民生委員長を勤めて村人の信頼を集めたと村長さんの弔辞にあるのはうなずける。山にスキーに戦後の白馬山麓の開発に尽したことは私もこの眼で見ている。

私の家内も昭和6年の春，猿倉小屋の合宿で丸さんのとってくれる兎料理を満喫してブナ林を毎日滑った思い出を持つ。この秋は30年ぶりで丸さんの家を訪ねるのを楽しみにしていたのに。私はこの春，ゼミナールの卒業旅行に学生と丸さんの家に泊ってスキーを遊び，5月には一人来て初めてこの里の春の花を眺め，丸さんとカタクリの咲き敷く林下をさまよった。

今年に限ってこんなに細野に通ったのは虫の知らせというものであろう。

カタクリの花と丸さん

私の博物館への一つの注文は丸さんに限らず，郷土の山の功労者のことだけは詳しい記録と資料を館の手で残してほしいことである。

3，父を通じてのこと

私の父，阿歌麿が白馬大池に湖沼観測のためカンパス・ボートを浮べたのは大正9年の夏で，よほど珍しかったと見え，報知新聞社は特派員を送って報道した。その記者は明大のマラソン選手で山が強いのも道理，快男子であったことを，給食係をつとめた私はよく覚えている。この人がいま衆議院議員の山口六郎次氏であることを最近確かめた。その時の舟の写真が陳列棚にあるが人物を網羅していないのが惜しい。

父は長年北安曇の三湖に通って「日本アルプス湖沼の研究」という一書を残したが，ヤナ場がお気に入りの宿所だった。父の死んだ翌年の終戦直後，ヤナ場の宿を訪

れたとき，この軸は横文字だというので憲兵隊がやかましくて掛けておけなかったと，父が主人に書き与えた毛毒で書いたフランス語の書を見せられた。父はベルギーとスイスで教育を受けたので日本字が不得手なところから，田舎の湖沼めぐりで書をたのまれるといつもこの手でごまかしていたのである。

木崎湖からはトッコという前史時代の削舟が出土したが，その最新（昭和29年）の発掘標本が館の陳列にあるのを見て私はギョッとした。全く同じものが，それはおらく最初の発掘品の仲間と思われるが，東京の父の家の玄関にあって戦災で焼失したのである。

4，対山館時代

私が大町へ初めて行ったのは大正3年燕・常念・ヤリのコースをやった時で，松本から馬車だった。昭和13年に新婚旅行に来て，スバリを登り，鹿島槍へ縦走して冷池から鹿島部落へ降って夜中になった時は，百瀬慎太郎さんの代になっていた。その翌年だったか，一ツ橋大の山岳部で吉沢一郎君らと春の針の木越えをした時は，雪崩模様に阻まれて平小屋で音信を断ち，対山館に心配をかけた。

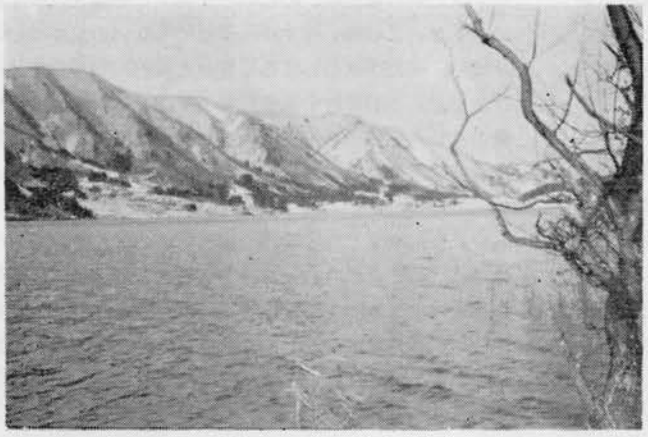
5，疎開時代

戦後慎太郎さんが対山館の筋向の露路にお嬢さんと閑居していたのをしばしば訪ねることが出来たのは私の疎開地が常盤で，妹のそれが大町の北の端れだったからである。私は昭和17年秋，有明の大和由松君と二人で多分これが山の見おさめになると覚悟して燕から南走して西岳山屋に泊り，天狗原のカール地形の観察を堪能した。その帰途，大和に勧められて私は脳溢血で臥床中の父のために常盤の林檎園を，また上海から引揚げた妹の家族のために大町の林檎園を手に入れた。私は神戸で大空襲に見舞われ逃げ出して常盤に辿りついた翌日が終戦で，そのままそこに住みつき，本籍を東京から移してしまったので大町は名義上の故郷になってしまったというわけだ。

6，おわりに

最後に館に対する希望をまとめて記すならば，それは東山公園は申し分のない場所，建物は広さは十分，要は内容の充実である。私の考えでは郷土の山に就いてだけは資料の正確と量において権威を持ち，体系を作り上げてほしいと思う。その道程としてぜひほしいのは日本アルプスの詳しい登山史年譜の展示である。壁面を広く使って文字の間に写真や図解を多く入れた見る年表とし，併せて，各時代の日本人の海外遠征と対照できるようにすることである。日本人登山史の中の日本アルプスを浮彫りすることである。

（神戸大学教授）



木崎湖禁猟区になる

各利害関係団体長の意見書を付した禁猟区設定申請書は5月8日，長野県知事に提出され，その結果木崎湖は11月1日より禁猟区となりました。昨年まで500羽位であった湖上の鴨の群は本年12月5日現在1600羽の群にふくれ上り，そしてこの鴨は湖の中心部だけに集まるという。以前の習性をくずし，今では岸近くまで遊ぎ寄ったり，ヨシの草むらに入ったりするようになりました。天気の良い日の木崎湖はグァグァと叫ぶ鴨，湖上を飛びまわる鴨などで大変にぎやかです。しかし人間だけは鴨も警戒し湖畔に人影が見えると大忙ぎで岸から遠ざかります。海ノ口公民館，海ノ口子ども会，山岳博物館などでは協力し合って，この鴨の群を岸まで誘い寄せ，人に馴れさせるという極めてやっかいな仕事に本腰を入れることにしました。すでに鴨のエ付けのために湖岸の2カ所に毎日モミガラ（ヌカ）野菜クズをまく仕事が行なわれております。この仕事を進めて行けば，鴨の数も増し更に彼等の生態をま近かに観察することもできるでしょう。

南アルプスに植物を追って(1)

中村武久

南アルプスに植物を求めて4年延40数日を南ア山中で過した。といっても決して南アルプスのオーソリティーと自称したいのではない。南アに取りつかれたように毎年夏がやってくると決って出かけたくなる南アの魅力と私なりの変った登山りの一面を紹介するまでである。

つい先日，同僚の文学の教師が私にこういった「あなたの山登りは，あらゆるものを越えて一途に山を愛するというような山登りではない，そうみせかけながら実は山をまた山にある植物を自分の仕事の場とし，また材料としているに過ぎないのではないか……。」これは私にとって甚だ気になる一言であるが，自身よく今までの山歴をふりかえってみると結果的にはなるほどとうなずけるふしもないではない。時に自分の仕事を忘れ山に登るだけの山登りをしたいと思って出かけてもきまって日頃の商売根性が出てしまい，山路を歩きながら目は道端の草木にとらわれているのである。こんな山登りであるから自ずから人一倍の時間がかかるのはいうまでもない。もちろんそれだけに同じ山へ登っても今まで人の足が踏み込まれたこともない谷合いや崖ふちを歩くこともあり，独り小さな満足も味わえるのである。

今夏の南アルプス行きもその例にもれず充分の時間をかけた山行きで，人の目に触れないハイマツの中に僅かに開けた草地で次の予定など全く忘れて這い廻るなど，山を楽しむための山登りの範？といってよかろう。

さて本題に戻すが，過去私の南アルプス行きには必ずといっていいくらい台風がつきものだ。あまり毎年のことであるため近頃では台風が来ることが当然のことと思うようになっている。昨年仙丈岳，駒ケ岳方面でも大雨に逢い，またその後続いて北岳，間ノ岳，塩見岳方面に登ったが，この折も前半台風にぶっかった。ただこの折はまだ山麓の荒川小屋〜池山小屋辺りで，もたもたしている間に台風一過後は至極快的な山行きだったが。そんな訳で今夏の赤石方面も当然台風あるものと予測していたのであるが，先頃この辺り一帯を荒した台風6号が去った後のためか，この頃には襲来の様子がなかった。しかし台風ならずとも雨はやってくる。かえってこの方が

千枚岳より東岳を望む

仕末が悪い，台風なら割に早く過ぎてくれるが，このショボショボ降り続く雨の方がいつまで続くか解らない。ともかくそんな中を予定通り出発した。

信州側小渋からの入山がむずかしいとか，結局甲州身延からバスで約2時間，田代川発電所から入ることにした。ここから転付峠，俗にいうデンツクを越え二軒小屋に下るが，この峠，見かけは差程でもないのだがなかなか遠い。発電所からしばらく登った渓谷沿いの崖腹に開けた山途，下の流れや滝を見おろす辺りなかなか先へは進めない。水気の多い谷合い，こんな所には植物も豊富なことはいうまでもない。2・30m進んでは荷物を置いて草叢に飛び込む，然し幸いなことに雨が時に強く降りつけ，またやがて途は傾斜を増してくる。こうなるとせいぜい登ることにせい一ぱいで手の届く範囲でしか植物を採らなくなる。やがて峠に至る頃は胴乱がじゃまにさえなってくるぐらいだ。そうこうして峠を越え二軒小屋についたのが6時，これでも我々にとっては早い方だったかも知れぬ。

途中三パーティーぐらいにぬかれたのは知っていたがいつどこから集まって来たのか広い小屋の中は人で一ぱいだ。どこの学生か知らぬがユカタを着てウイスキーのビンをぶらさげ，何が楽しいか小雨の中をわめき廻っている。せっかく一山越えてたどりついた山の中だのにこんな俗っ気があるとは思わなかった。

翌日はここから荒川小屋まで行く意気込みだったが，何もそんなに急ぐ旅でもなかろう。一日でも余計山にお

ればそれだけ余分に楽しみもあろう。というわけで早くも例によって予定変更をして二軒小屋を後にした。ここからの登りは傾斜も急で思うように進まない。

ザックに入りきれず，上につんだ新聞紙の荷物が，ビニールのすき間から入りこむ雨でぬれ始め，だんだん荷物が重くなる。こうなってくると植物調査もクソ喰えだ時々思い出したように目ぼしいものを採るくらいで，既に胴乱はザックの上にあがっている。普通の足ならもう千枚岳を越へ東岳（悪沢岳）へ登っていようと思われる頃，我々はようやく尾根すじにたどりつき，ときおり晴れるガスの間に南アの山肌を仰ぐばかりだ。やがて尾根すじに開けた平担部，背の高いキオンやトリカブトの繁る草地にテントを張る。別に水場があるわけでない，ただテントが張れる場所だというだけだ。しかしシラカバの木立ちに囲まれた草地で日の高い時間に設営する気分もなかなかいいものだ。ただ残念なことは水を節約しなくてはならないから，うまいご馳走を作る訳にはいかない。いうまでもなく飲み水は配給だ。幸い一時強く降った雨でこと足りて，翌日はいよいよ待望の東岳へと向う

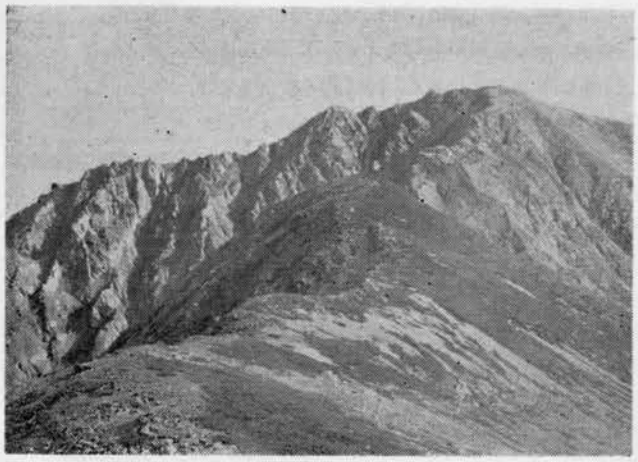
東岳（3146）は今回の調査の主目的地であり，昨年仙丈岳で遂に探し得なかったセンジョウデンダをなんとかみたいものと思っていたのである。仙丈岳での記録はかなり古く場所も明瞭でないが，ここ東岳の記録は黒沢美房氏によってかなりはっきりしている。こんなことから是が非でも探す予定だった。

千枚岳の上で，頂上附近に奇岩屹立する東岳の山容に魅入ったり，植相豊富なこの辺りで大分時間をついやしたため，東岳の肩にかかった頃，今まで晴れていた空が曇り，やがて風にまじって横なぐりの雨が降りだした。雨の中ハイマツのかげでふるえながら昼食をとり，それでもまだ東岳での収穫を期待しながら登った。ところが東岳の頂上にかかる頃，風雨に混って濃いガスにまかれいかに大目的であってもセンジョウデンダを探すどころではない。まだセンジョウデンダと心中する気にはなれなかった。結局あきらめて荒川小屋へ向う。しかし何んとしてもあきらめ切れず，途中ガスの晴れ間を見はからってはその辺りを探す。けれども思ったより東岳の植相は貧弱だ。シダの影などどこにも見あたらない。　礫地の所々に小さく開けた草地を探せば，あるいはヒメハナワラビぐらいはと思って探すが，南アルプスでごく普通のナヨシダさえも姿をみせない。記録にあるセンジョウデンダの東岳産は，あるいは植相豊かな千枚岳の誤りではないかと疑うほどだ東岳にこだわり過ぎて実は千枚岳以外ではシダ植物に目をうばわれ，シダを探してみなかったのである。これも後の祭り結局シダでは，タカネスギカズラとヒモカズラの二種を得たのみであった。

千枚岳はちょうど北岳の八本歯辺りによく似ており，岩隙にオオビランジの花がみごとに咲き，またイワインチン，アサギリソウなどの小群も南アルプスならではの景観である，この他シロウマオオギ，シコタンハコベ，シナノオトギリ，クモマナズナ，タテヤマキンバイなどかなり多産し，時には目をうばわれて足元の危険も忘れるくらい。とにかく目的のものは収穫できなかったが，千枚岳での景観や植物にせめてもの気持を満足させ荒川小屋に入る。　荒川小屋は思ったより小さい，これは小さいというより，むしろ泊り合せた登山者が余りにも像想以上に多かったためかもしれない。

いやこれは単に人数の問題でなしに，その時の小屋の中の雰囲気がそうさせたのかとも思われる。どこかの大学の山岳部かあるいはワンダーフォーゲル部の連中だろう。山小屋一ぱいに自分たちの場所を占有し，夕刻，しかも雨にぬれている我々を小屋に入れようとしないのだこちらの戸口から入ろうとすれば向うへ廻って下さい。といって向うへ廻れば，こちらからは入れませんよといわれる。こうなっては致し方ない。片隅の土間に小さな空間をみつけ，いやな顔をされながらそこに割り込んでようやく休むことができた。互いに山に来て，各々の目的にそった楽しい山行きにしたいなら，もっとゆずり合い助け合ってこそ山の本当のよさがあるものを，楽しくあるべき山小屋でこんなでは彼等自身も楽しくないのではなかろうか。長蛇の列を成して人のひしめき合う北アでもそうあることではない。

ましていまだ一般的に知られていないこの辺りの山でこんな気分を味わうとは夢にも考えられなかった。でもそうかといって，そうした連中にこだわっていたのでは本来の楽しくある筈の我々の山行きも駄目になってしまう。明日からのまた目的多い山での収穫を期待しながら自らを慰め一夜を過す。明日はいよいよ第二の目的地赤石岳だ。　（本館嘱託学芸員，東京農大高校教諭）



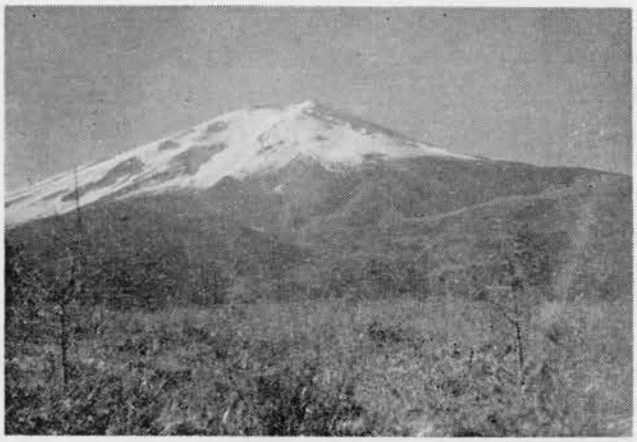
荒川岳

初冬の富士にのぼって

鈴木 操

まだ夜の明け切らない，星のチカチカ青く光る空の下を，吉田口の林道を走るトラックの上で見た富士は，ほの白い満月に照らし出されて真に美しく，神秘的でさえあった。ところが，森林限界附近で見た富士は，砂地に軽石のような黒い石がガリガリところがって，山頂を仰ごうにも，雪に覆われた巨大な山塊が目にせまるばかりである。いさゝかの興ざめを感ずる一方，何とはなしに富士山が恐ろしいもののように思えて来た。

翌朝5時，山頂にのぼるべくテントを出発したのだが相当な強風が，わたしたちの登頂を拒まんとするように吹きまくっている。月は岩と凍てついた雪を無気味に青白く照らして，わたしの恐怖心を容赦なくかりたてる。



馬返しより望む富士山

岩肌が完全に雪にかくれて，アイゼンのツアッケが小気味よく利くようになって，ようやくわたしは心の落ちつきを取りもどした。はるか遠く下をかえり見れば，河口湖や山中湖が黒く光って横たわり，明けやらぬ街の灯が点々とともり，富士の裾野の広さを一望する。

八合目の手前で，朝日が遠い雲海から昇ぼりはじめると，東の空が金色にパッと明るくなった。この色がほんとうのこがね色というのだろう，と，わたしは他愛なく感激してそのこがね色の空の中でしばらく立ちつくしていたけれども，しばらくすると，下界と頂上から同時に雲が発生し，視界がみるまに消えてしまった。わたしたちは再び強風に向って登り出した。

長かった登りも終り，やがて氷に覆われた鳥居が見えやっとわたしたちは吉田口頂上に立った。雪に理もれた風変わりな小屋や，大きな岩のいたるところにへばりついた氷の塊が印象的であった。

午前10前，最高峰3.776米の剣ガ峰に立った時には，残念なことに視界が全くきかず，氷点下25度，風速30米以上という悪条件の中で，単に富士の頂上に立ったということだけで満足しなければならなかった。

帰途では，火口から吹き上げる突風の恐ろしさをいやというほど思い知らされた。風のあい間を盗んでは岩陰にかくれ，地に伏し，一瞬一瞬が風との格闘である。強風にまじる氷片が，パンパンと容赦なく顔や耳を打つ。その上，吐く息が凍ってまつ毛を閉ざし，前方をはっきりと見極めることもできず，吉田口頂上，久須志神社までは，全く生きた心地もない緊張の連続であった。

下りも長い時間であった。テントに着くまで，ついに強風からは解放されなかった。全神経を足もとに集中して，風に負けじと一歩一歩下る。一歩踏み誤まれば，とどまるところ知らず，下まで落ちてしまうだろう，その懸念が終始頭にあって，精神的な消耗も大であった。下界が晴れて一望のもとに見えるのだが，それがかえって高さを思わせて楽な気持になれないのである。

テントが近づくにつれて，やっとわたしに物を思う気持がよみがえって来た。フッと，わたしは富士山に裏切られたという気がした。昨晩トラックの上で見た時にはあんなにやさしい姿をしていたのに，親しくのぼってみると，あばれ放題でわたしたちをもてあそんだ。この山が憎いと思った。が，何かわたしをひきつけるものがった。苦闘して登ぼって帰って来た，その充足感からだろうか……。

テントを撤収して，裾野ののどかな林道を歩きながらふりかえった富士は，来た時に見た富士と同じ，やさしい美しい富士であった。夜と昼のちがいはあれど。わたしにとって富士山は厳しかったけれども，いつまでも懐しい山となるにちがいない。そして富士を見るにつけてほんとうの富士は，あの美しい姿の富士ではなくて，わたしの体験した富士なのだということも。

（大町山の会）

白鳥を待つ

海川庄一

1羽のオオハクチョウ

ことしの1月23日，1羽のオオハクチョウが木崎湖（長野県大町市平区）にやって来ました。大町にオオハクチョウが飛来したのは昭和25年以来実に11年ぶりのことでした。

さっそく，地元海ノ口地区の公民館や山岳博物館では，これの保護運動に乗り出しオオハクチョウに餌を与える仕事と，白鳥愛護の思想を普及し木崎湖を禁猟区にまで持って行く仕事とが並行して進められたのでした。地元の海ノ口地区の公民館・子ども会・青年団では博物館の館員をまじえて，白鳥保護の打合せ会が持たれ，更に農家実行組合や，婦人会，自治会などの代表者を含めての合同打合せ会が開かれ，部落ぐるみの保護態勢が固められて行きました。一方平小学校の協力もあって，運動は急速に湖畔全域に広がり，3月30日には，公民館平支館において，木崎湖観光協会，平猟友会，木崎湖漁業協同組合，国鉄大糸線海ノ口駅，海ノ口青年団，平青年学級森，山崎，稲尾，海ノ口各公民館，各自治会，各婦人会各農家実行組合など，地元利害関係団体代表の出席を得て「白鳥保護打合せ会」が行なわれました。

この席上木崎湖を禁猟区にすることについて提案がなされ，地元の全面的な賛成が得られたのでした。そしてその翌日1羽のオオハクチョウは木崎湖を去って行きました。

子どもたちの願い

カモもオオハクチョウも飛び去ってしまった湖面を眺めながら，来る年の冬，再びオオハクチョウが仲間をつれて来てくれることを切実に願っている子どもたちのグループがあった。登下校の折，毎日白鳥の様子を観察し「白鳥日記」をつけ続けて来た「海ノ口子ども会」のお友だちです。たった1羽でやって来たオオハクチョウ，たとえそれが，北へ帰るギリギリの季節まで木崎湖を安住の地としていたとしても，翌年の冬必ず戻ってくるとは云い切れません。子どもたちの願いを裏切らない一つの方法として，ますコブハクチョウ一つがいを受け入れて湖畔で飼育・増殖をはかり，逐次湖へ放すと共に，長い目でオオハクチョウ飛来のチャンスを待つという方法が考えられました。皇居のコブハクチョウを受け入れるという話は数年前から元千代田区長，村瀬清氏（大町市出身）から出されておったのですが，この話を具体化するために平林泰雄氏（市会議長）田中保平氏（毎日新聞記者，山博協議会委員，山博友の会会長）伊藤貞雄氏（市会議員）らが努力されました。

白鳥を浮べる会

11月1日，本館創立10周年記念式の席上，皇居のコブハクチョウ受け入れについての下話の経過が発表されました。地元の受入態勢の整い次第一つがいを贈るというのが皇居外苑保存協会の意向でした。この好意を汲んでさっそく地元の態勢の整備がはかられました。11月27日には稲尾公民館に木崎湖周辺の各種関係団体の代表が集まり，コブハクチョウ受入れに対して，地元として全面的に賛意を表すると共に積極的に協力するという態度を決め，傘木修氏（市会議員）を通じて大町市並びに市議会に対して早期受入れの要請がなされました。又海ノ口地区では自治会長を中心として公民館，婦人会，青年団子ども会，農家実行組合などの幹部を役員とする「白鳥を浮べる会」が発足しカモのエ付けなど継続的な活動をはじめました。

コブハクチョウのこと

現在皇居外苑のお濠で飼育されているコブハクチョウは，昭和28年ドイツから移入されお濠に放たれたものでその数は24羽でした。外苑保存協会が発行した「お濠の白鳥」という報告によれば，これらの白鳥は昭和30年成鳥に達し，3コの巣を営み，産卵数13コ，ヒナ4羽を孵化したのですが，成育を完とうしたのは2羽だけであったとのこと。翌昭和31年には7巣が営まれ，1巣は不完全，6巣で合計38コの産卵があり，うち20羽のヒナがかえったが，このうち羽切手術（フ化後1.5カ月）後まで健全に育ったものは11羽。フ化しなかった18コの卵は，カラスの害と思われるもの3，人工フ化の不成功3，親鳥がこわしたもの6，無精卵と見られるもの6，又，フ化直後落鳥した9羽についてはカラスにとられたと思われるもの1羽，餌箱内で死んだもの1羽，親鳥が殺したもの3羽，原因不明4羽となっております。こうした例より見てコブハクチョウの増殖には相当な困難が伴なうことが予想されます。

本格的な冬が防れるとともに，北アの麓，ここ大町市はいま北からやって来るオオハクチョウと，お濠から輿入れるコブハクチョウへの期待がますます高まりつつあります。

長野県当局，地元関係団体の皆様はじめ，各位のご努力によって，白鳥保護運動もここまで到達することができたことを何よりもうれしく思います，今後共木崎湖水禽園の達成に向って，手をたずさえて前進されますようお願いいたします。　（**山岳博物館主事**）

博物館だより

羽田健三氏理学博士に

本館嘱託，信州大学助教授羽田健三先生は京都大学に「内水面に棲息する雁鴨科鳥類の採食型と群集に関する研究」なる学位請求論文を提出されておりましたが，去る10月，理学博士号がおくられました。これは鴨を主体にした十数年の研究が実ったもので，12月17日大町市において記念祝賀会が催された。

10周年記念式典行なわる

11月1日，山博創立10周年記念式典は本館々庭で行なわれ，下記の各部門の功労者に感謝状と記念品が贈られた。古川 潔，羽田健三，伊藤半二，阿部酉与，石原守明 下川高次郎，福島 融，長沢欽平，柏原長寿，百瀬美江 大町市公民館海ノ口分館，高橋長治，高橋 靖，上条為人，西沢亀太郎，西沢岩男，内山重衛，伊東伊三郎

（敬称略　順不同）

柏原長寿氏逝く

鹿島槍冷池小屋・爺ガ岳種池小屋を経営し〃つべたのぢち〃と山の仲間に親しまれていた，柏原長寿氏は去る11月17日脳出血のため他界された。氏は17才から山に入り62才で逝かれるまで，山と共に生きて来たもので，その死は惜しまれる。

資　料　寄　贈

オシドリ　1体　松川村　榛葉泰章　白化スズメ　1体　松川村　井上袈裟治　バン　1体　池田町　北原智秋　カケス　1体　白馬村　郷律光三　アカエリヒレアシシギ　池田町　窪田義信　ヨシゴイ　1体　大町市常盤区　浅野繁喜　（敬称略）

私は思う

10周年を迎えた山博のあり方について，11号において皆様より種々のべられておるが，私は関係者の一人として今后のあり方，進め方について意見を申しのべてみたい。山博の運営や計画に対して協議会の全員部員の皆様も全面的に賛意を表して居るが，これを実際に実行して行く場合に計画に対し又予算面等について理事者及び議会側の全面的に同意が得られるか私は心細さを感じる。山博も10年の歩を経て成長して来たが必ずしもすくすくとして成長したものでなく，職員，部員各位の血の出る様なご努力とご協力に依りて細々と育って今日の成長を見たのであるが，なお今后といえども苦難の道を進まねばならないと思われる。又日本有数の博物館として尚充分の施設の拡充を計らねばならない。山博のあり方としては山博独自の計画でなく大町市政全般の総合的な計画を樹立せねばならない教育行政，都市計画，観光行政，厚生施設など総合的に審議して各課各部門が一致協力して山博の進路を決定づけるべきと思う。

秘境黒部を中心とする（引湯を含む）観光開発の地鎮祭も行なわれ着工も間近に迫られている。これと併行して市内の観光開発も行なわれなければならない。これには山博を中心とする東山よりの他に候補地はない，幸にして37年度には動物の移転に関して予算化されると承り又とない10周年記念事業と思っている。黒四工事終了後の観光開発計画によると大町市への観光客は年間120万人～150万人と予想しており，この観光客の市内足止めは大町東山，山博を中心とする施設拡充より他に何物もない，市民一丸となって山博を中心とする公園全市民の憩の場所としての東山とするべきである。大町市は県下唯一の躍進都市であると他市より羨望されて来たが，この所4・5年はその発展が認められない須坂市，中野市，塩尻市，伊那市その他の都市の工場誘致，観光施設，道路行政と非常な熱意で発展されておる，大町市もこの所を充分研究して他市に劣らぬ様努力すべきある。　（広瀬英吉）

お願い　本紙の購読ご希望の方は**1カ年購読料200円（郵送料とも）**を現金書留または**郵便為替，郵便切手**で**長野県大町市，大町山岳博物館**あてご送金下さい。　**大町山岳博物館**

山と博物館　第6巻第12号　1961年12月25日発行
発行所　長野県大町市TEL（大町）211
大町山岳博物館
印刷所　大町市上仲町
信州印刷大町工場